

博士論文（要約）

論文題目 淡路方言の記述と系統

氏 名 中澤 光平

目次

図・表.....	1
略号・記号.....	5
要旨.....	6
はじめに.....	8
第1部 (淡路方言の総合的記述)	13
1. 淡路島および淡路方言.....	14
1.1 淡路島の地勢と沿革.....	14
1.2 淡路方言概要.....	15
1.3 調査概要.....	15
1.3.1 調査方法.....	15
1.3.2 話者.....	16
1.3.3 本論文に関する調査のまとめ.....	17
2. 先行研究.....	23
3. 淡路方言の音声・音韻.....	24
3.1 音素目録.....	24
3.2 濁音における前鼻音.....	28
3.3 音節構造と音素配列.....	34
3.3.1 音節構造と音素配列.....	34
3.3.2 語頭のモーラ音素.....	35
4. 淡路方言の形態.....	36
4.1 合成語の語形成.....	36
4.1.1 複合名詞.....	36
4.1.2 複合動詞.....	37
4.1.3 複合形容詞.....	39
4.1.4 疊語.....	39
4.1.5 派生語.....	39
4.1.6 合成語の規則のまとめ.....	39
4.2 活用.....	40
4.2.1 動詞の活用.....	40
4.2.2 形容詞の活用.....	45
4.2.3 助動詞の活用.....	45
4.3 指示詞の語形変化.....	46
4.4 一段動詞の五段化.....	47

4.5	音節の融合.....	47
4.5.1	音節融合.....	47
4.5.2	助詞「ガ」・「ハ」の融合.....	55
4.5.3	助詞「バ」と文末詞「ワ」の融合.....	65
4.5.4	助動詞「ヨル」の融合.....	68
4.5.5	助動詞「ジャ」の融合.....	70
5.	淡路方言のアクセント.....	71
5.1	名詞のアクセント.....	72
5.1.1	単純名詞.....	73
5.1.2	複合名詞.....	75
5.2	動詞のアクセント.....	76
5.2.1	単純動詞.....	76
5.2.2	複合動詞.....	81
5.3	形容詞のアクセント.....	83
5.3.1	単純形容詞.....	83
5.3.2	複合形容詞.....	86
5.4	付属語のアクセント.....	88
5.4.1	付属語のアクセント.....	88
5.4.2	助動詞「ジャ」と促音化.....	91
5.4.3	助詞「ノ」と時空間連語.....	106
6.	淡路方言の統語.....	108
6.1	主語・主題と「ガ」・「ハ」の融合形.....	108
6.2	「ワガ」, 「ボッカシ」などの所有形式.....	110
6.3	「ヨル」・「トル」と「ヨットラ」.....	112
6.4	不定詞に関する諸現象.....	120
6.5	文末詞の機能と語順.....	122
7.	淡路方言の語彙.....	125
7.1	音韻の特徴.....	125
7.2	語法の特徴.....	126
7.3	語彙の特徴.....	127
8.	淡路方言の地域差.....	128
8.1	音韻の地域差.....	129
8.2	語法の地域差.....	146
8.3	語彙の地域差.....	148
8.4	地域差に基づく淡路方言の共時的下位区分.....	156

第 2 部	(特定地域の個別的記述)	159
9.	淡路市北淡方言のアクセントと重起伏調	160
9.1	本章の目的	160
9.2	先行研究	160
9.3	調査内容	160
9.4	結果	161
9.5	考察	168
10.	洲本市由良方言の音節構造と語頭子音連続	170
10.1	本章の目的	170
10.2	先行研究	170
10.3	調査内容	170
10.4	結果	171
10.5	考察	178
11.	南あわじ市沼島方言のアクセントと 2 単位形	180
11.1	本章の目的	180
11.2	沼島方言の概要	180
11.3	調査内容	180
11.4	結果	181
11.5	考察	190
第 3 部	(淡路方言の歴史と系統)	192
12.	淡路方言の地域差と成立過程	193
12.1	本章の目的	193
12.2	淡路方言の地域差と成立過程	193
12.3	改新に基づく下位区分の系統関係	200
13.	淡路方言の系統的位置	203
13.1	本章の目的	203
13.2	改新的特徴の整理	203
13.3	淡路方言の系統的位置	207
まとめと展望		210
参考文献・資料		212

本文

5年以内に出版予定。

参考文献・資料

- Hayes, Bruce. 1989. Compensatory lengthening in moraic phonology. *Linguistic Inquiry* 20. 253–306.
- Ryan, Kevin M. 2014. Onsets contribute to syllable weight: Statistical evidence from stress and meter. *Language* 90: 2. 309–341.
- 秋永一枝 (1980) 『古今和歌集声点本の研究』研究篇 上. 東京: 校倉書房. 551pp.
- 五十嵐陽介, 田窪行則, ペラール・トマ (2012) 「南琉球宮古語池間方言におけるアクセントにおけるアクセント型の中和と合流」日本語レキシコンの音韻特性 第3回研究発表会 (配布資料) .
- 井上史雄 (1968) 「東北方言の子音体系」『言語研究』52: 80–98.
- 岩本孝之 (2013) 『じょろりでいこか! 淡路ことば辞典』神戸: 神戸新聞総合出版センター. 436pp.
- 上野和昭 (2011) 『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』早稲田大学出版部. 576pp.
- 榎垣実編 (1962) 『近畿方言の総合的研究』東京: 三省堂. 646pp.
- 上野善道 (1973) 「岩手県雫石町方言の音韻体系」『日本方言研究会第17回研究発表会発表原稿集』: 23–34.
- (1985) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(1)」『日本学士院紀要』40-3: 215–250.
- (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42: 15–70.
- 編 (1989) 「音韻総覧」『日本方言大辞典』下巻: 1–77.
- (1992) 「昇り核について」『音声学会会報』199: 1–14.
- (1995) 「伊吹島方言アクセントの年齢別変化」『東京大学言語学論集』14: 99–199.
- (1997) 「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子監修『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』: 231–270.
- (2000) 「奄美方言アクセントの諸相」『音声研究』4(1): 42–54.
- (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1–42.
- (2009) 「服部音韻論の再評価」『東京大学言語学論集』28: 219–246.
- (2009) 「琉球与那国方言のアクセント資料」『琉球の方言』34: 1–30.
- (2010) 「鼻濁音考」日本音声学会第24回全国大会特別講演 (配布資料) .
- 興津憲作 (1990) 『淡路方言—特徴・語法・アクセント・語彙』旧津名郡一宮町: 兵庫県立淡路文化会館. 132pp.
- 奥村三雄 (1990) 『方言国語史研究』東京: 東京堂出版. 842pp.
- 鎌田良二 (1982) 「兵庫県の方言」『講座方言学7 近畿地方の方言』: 229–252.
- 川原繁人・竹村亜紀子 (2015) 「連濁は音韻理論の問題か」西原哲雄 編『現代の形態論と音韻論の視点と論点』: 213–236.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15: 48–63.
- (1960) 「国語のアクセントの時代的変遷」(金田一春彦 (2005) に所収)

- (1964) 『四座講式の研究』 東京: 三省堂. 586pp.
- (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』 東京: 塙書房. 306pp.
- (2005) 『金田一春彦著作集 第九卷』 東京: 玉川大学出版部. 656pp.
- 監修, 秋永一枝 編 (2010) 『新明解日本語アクセント辞典』 東京: 三省堂. 1072pp.
- 工藤真由美 (2004) 『日本語のAspect・Tense・Mood体系—標準語研究を超えて—』
東京: ひつじ書房. 335pp.
- 久野眞 (2006) 「高知方言の前鼻音」『音声研究』 10(1): 60–69.
- 国立国語研究所 編 (1963) 『沖繩語辞典』 東京: 大蔵省印刷局. 854pp.
- 小西いずみ (2016) 『富山県方言の文法』 東京: ひつじ書房. 376pp.
- 鈴木豊 編 (2003) 『日本書紀人皇卷諸本 声点付語彙索引』 東京: アクセント史資料研究会.
526pp.
- 高橋顕志 (1982) 「淡路島の方言」『講座方言学 7 近畿地方の方言』: 253–276.
- 高山林太郎 (2012) 「四モーラ置語を音調と意味で分類する試み」『語彙・辞書研究会第 41
回研究発表会』(資料集): 17–24.
- 田中萬兵衛 (1934) 『淡路方言研究』 旧津名郡洲本町: 福浦藻文堂書店. 172pp.
- 近石泰秋 (1982) 「四国方言の語彙」『講座方言学 8 中国・四国地方の方言』: 295–316.
- 東條操 (1927) 『大日本方言地図』 育英書院.
- 中井幸比古 編 (1997) 『高知市アクセント小辞典』 神戸: 神戸市外国語大学. 231pp.
- ・高田豊輝・大和シゲミ 編 (1999) 『徳島市方言アクセント小辞典』 神戸: 神戸市外国
語大学. 263pp.
- 編 (2001) 『京都市方言アクセント小辞典』 神戸: 神戸市外国語大学. 336pp.
- (2001) 『兵庫県南部方言アクセント小辞典』 神戸: 神戸市外国語大学. 204pp.
- 編著 (2002) 『京阪系アクセント辞典』 東京: 勉誠出版. 611pp.
- (2003) 「アクセントの変遷」上野善道 編『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』: 85–108.
- 中澤光平 (2011a) 「淡路島方言における『助詞「が」「は」の融合形』とその音韻的解釈」
『日本方言研究会第 92 回研究発表会発表原稿集』: 1–8.
- (2011b) 「淡路島方言における動詞のアクセント体系の地域差」『東京大学言語学論集』
31: 187–196.
- (2012a) 「淡路島方言におけるアクセントの地域差と歴史—京阪神方言、四国方言との
対照—」『JLVC 2012 予稿集』: 55–58.
- (2012b) 「淡路島方言における音節融合と代償延長」第 7 回(琵琶湖)音韻論フェスタ
(配布資料).
- (2013a) 「南あわじ市沼島方言の複合語アクセントから推定される低起式音調の通時的
変化」『2013 年度日本語学会春季大会予稿集』: 61–68.
- (2013b) 「淡路方言の地域差と成立過程」『JLVC 2013 予稿集』: 195–204.
- (2014) 「地域差に基づく淡路方言の下位区分の試み」『東京大学言語学論集』 35: 187–

- 中西信弥 (1999) 『西陣織屋ことば辞典』 京都: ウインかもがわ. 107pp.
- 新田哲夫 (2005) 『石川県白峰地方の方言特徴と方言テキストの語法』 金沢: 金沢大学文学部. 126pp.
- (2011) 「福井県三国町安島方言における maffa 《枕》等の重子音について」『音声研究』 15(1): 6–15.
- 丹羽一彌 (2005) 『日本語動詞述語の構造』 東京: 笠間書院. 198pp.
- 禰宜田龍昇 (1986) 『淡路方言の研究』 神戸: 神戸新聞出版センター. 234pp.
- 服部四郎 (1979) 『新版 音韻論と正書法』 東京: 大修館書店. 378pp.
- 早田輝洋 (1977) 「生成アクセント論」『岩波講座 日本語 5 音韻』: 325–360.
- (1997) 「平安時代京畿アクセントに関する幾つかの問題」『音声研究』 1(2): 37–44.
- 肥爪周二 (2008) 「撥音史素描」『訓点語と訓点資料』 120: 12–27.
- 平田秀 (2011) 「三重県鈴鹿市方言の後部 3 拍複合名詞のアクセントについて(2)」『東京大学言語学論集』 31: 53–66.
- 藤原与一 (1990) 「瀬戸内海域に推定される言語上の東西南北交流」『内海文化研究紀要』 18・19: 161–164.
- 松浦年男 (2012) 「宮古諸方言の音声実現に関する予備的検討」『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 宮古方言調査報告書』: 111–126.
- 三宅知宏 「対照方言研究の試み—不定語疑問文をめぐる—」『鶴見大学紀要』 52: 1–28.
- 松森晶子 (1995) 「下降式アクセントの由来と四国東北部諸方言の系統—3 モーラ語第 5 類の 2 種の音調型をもとにした考察—」『東京大学言語学論集』 14: 557–581.
- (1997) 「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント体系」『国語学』 189: 15–29.
- ・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古 編著 (2012) 『日本語アクセント入門』 東京: 三省堂. 223pp.
- 山岡華菜子 (2012) 「淡路島のアクセントについて—アクセントの変化傾向と進度の違い—」『日本方言研究会第 95 回研究発表会発表原稿集』: 49–56.
- (2014a) 「淡路島方言アクセントにおける二拍名詞—第 4・5 類の合同傾向—」『早稲田日本語研究』 23: 24–35.
- (2014b) 「京阪式アクセント地域における 3 拍形容詞のアクセント—淡路島・大阪府南部を中心に—」『国文学研究』 172: 47–37.
- 大和シゲミ (1993) 「低起式の音声的変種—徳島県阿南市宝田町の場合—」『待兼山論叢』 27: 37–50.
- (1999) 「徳島市津田・新居浜地区のアクセントの内省報告」(中井ほか 編 1999 に所収)
- 山本俊治・飯野百合子 (1962) 「兵庫方言—その分布と分派—」『武庫川女子大紀要』 10: H-73–108.

- 脇道夫（1965）「淡路方言—活用語と助詞に関して—」『洲高国漢』：別冊特別号.
和田實（1994）「兵庫県の方言」『兵庫県風土記』：488-491.

論文の内容の要旨

論文題目 淡路方言の記述と系統

氏 名 中 澤 光 平

本論文「淡路方言の記述と系統」は、筆者の現地調査で得たデータを基に、方言学、言語学的な視点から淡路方言の詳細な記述を行うとともに、淡路方言の歴史、系統について考察することを目的とする。

本論文は第1部～第3部の3部構成から成る。構成は以下の通り。

要旨

はじめに

第1部 (淡路方言の総合的記述)

1. 淡路島および淡路方言
2. 先行研究
3. 淡路方言の音声・音韻
4. 淡路方言の形態
5. 淡路方言のアクセント
6. 淡路方言の統語
7. 淡路方言の語彙
8. 淡路方言の地域差

第2部 (特定地域の個別的記述)

9. 淡路市北淡方言のアクセントと重起伏調
10. 洲本市由良方言の音節構造と語頭子音連続
11. 南あわじ市沼島方言のアクセントと2単位形

第3部 (淡路方言の歴史と系統)

12. 淡路方言の地域差と成立過程
13. 淡路方言の系統的位置

まとめと展望

第1部では淡路方言全体に関する共時的な総合的記述を行った。淡路方言といっても島内で様々な違いがあるが、淡路方言全体に関わる内容を中心に扱った。

1章では、本論文の前提知識となる淡路島の地勢と沿革および淡路方言の概要について説明した。淡路島は瀬戸内海の中で最東部かつ最大の島で、本州と四国の間に位置し、現在は兵庫県に属し、方言区画でも近畿方言に分類されてきたが、江戸時代には徳島藩の所領だったこともあり、淡路方言には兵庫県を中心とした近畿地方西部の影響と徳島県を中心とし

た四国地方の影響があると考えられ、所属が明らかでないことを説明した。また、本論文での淡路方言の定義について述べるとともに、筆者が行った淡路島および沼島での調査方法と話者、調査日程についてまとめて提示した。

2章では、淡路方言のこれまでの研究史、すなわち先行研究についてまとめた。淡路方言の先行研究は昭和の初期からと日本語の方言の中ではかなり早い段階から行われているものの、地元の研究者によるものの比重が大きく、方言学・言語学的な整理が必要なことを述べた。

3章では、淡路方言の音声・音韻について、先行研究を基に筆者の調査データにより修正を行いつつ整理した。特にガ行・ダ行における前鼻音について、同様に前鼻音が見られる東北方言の1つである盛岡市方言と対照しつつ詳しく記述し、前鼻音を伴わない濁音と音韻的な対立をなさないことから、ガ行・ダ行の子音ともに音素としては1つを立てれば良いことを示した。

4章では、淡路方言の動詞・形容詞の活用と音節の融合を中心に記述した。活用では様々な基底形と派生規則を設定し、例えば動詞命令形は基底に[-e]を立てることで活用型を問わず統一的に表層形を導けることなどを示した。また、音節の融合では単一の形態素にはない[tja], [sja], [w̃a]のような二次的な拍が現れることを示し、また音節の融合にはいくつかの種類があり、モーラを保存する例と保存しない例があるが、両者は変化が生じた時期が異なると考えられることを主張した。

5章では、淡路方言のアクセントの記述を行った。淡路方言のアクセントは京都や大阪と同様に中央式に属するが、名詞の3拍H2型の残存や動詞終止形での3拍H1型など、中央式の中ではやや古い特徴を保持していることを示した。また、淡路方言では促音が核を担うことがあり、関連して、促音の前後で核の位置が対立すると考えられる例についても分析した。さらに、中央式諸方言に観察される時空関連語における助詞「の」の低接についても幅広く調査し、アクセント変化に意味が関係する興味深い現象であることを述べた。

6章では、淡路方言に見られる文法の特徴についてまとめた。助詞「ガ」・「ハ」の融合形は、概ね標準語の「が」・「は」が現れる位置に対応し、主語と主題をマークするのに対し、目的語はゼロ標示が普通であることから、淡路方言が有標主格型であることを述べた。一方で、北部では動作主的でない主語がゼロ標示も許容する例があることから、近畿中央部のように主語も目的語もゼロ標示を基本とする体系へ移行する過程にある可能性を考察した。また、淡路方言には「ヨル」と「トル」が共起する形式「ヨットラ」があることを示し、「ヨットラ」の成立過程には「トル+ワ」>「トラ」が終助詞（文末詞）として文法化したと考えるべきことを述べた。さらに、疑問詞疑問文の主文では、述部が連体形あるいは条件形を取るといふ、中国方言や四国方言と共通の現象が見られることについても記述した。

7章では、淡路方言の語彙の特徴について記述した。[キキビス]「踵」を例に、 $C_1-C_2-C_2 \rightarrow C_1-C_1-C_2$ という不規則な音変化について、類例とともに示した。また、[グチナ]「蛇」を例に、動物名の語頭濁音形についても考察を行った。[タトム]「畳む」などからは、現在

は観察されないがかつてはバ行・マ行ウ音便が淡路方言にも存在したことを主張した。

8章では、7章までで中心的に記述しなかった淡路方言の地域差を中心に取り扱い、アクセントや語彙についての淡路島内50地点程度の言語地図を描き、それを基に淡路方言の共時的な下位区分を試みた結果、現在の3市にほぼ対応する形で北部、中部、南部に3区分されることを示した

第2部では淡路方言の中でも特に特徴的な地域について個別の記述を行った。8章で述べたように、淡路方言には地域差が見られるが、その中でも特に特徴的な地区と現象について、ここで個別に記述した。

9章では淡路市北淡方言の重起伏調というアクセント現象について記述した。重起伏調は日本全国でもいくつかの方言に見られるが、淡路方言のように式の対立がある方言における重起伏調は比較的珍しく、その記述は重要であると考えられる。特に、北淡の重起伏調に見られるL式文節が先行した場合の語頭隆起強化は、重起伏調から有核に転じる有力なプロセスの1つと考えられる。

10章では洲本市由良方言の語頭子音連続について記述した。由良方言は近畿方言では珍しい連母音の融合が見られるなど特徴的な方言として知られるが、語頭に促音が立つ例が多いなど、音素配列でも特殊な点がある。この方言の語頭子音連続に見られる最大の特徴は、長さの三項対立が見られることである。これは今のところ他の日本語の方言には見られない特異な現象である。

11章では南あわじ市沼島方言のアクセントの2単位形について記述した。この方言では淡路方言の中でも複合語を中心にアクセントの2単位形が豊富に観察される。主に共時的な記述を行いつつ、一部で通時的な説明を試み、沼島方言の2単位形が持つ歴史的な位置づけについて論じ、沼島方言の淡路方言内での系統的な位置についても考察した。

第3部では淡路方言の歴史的発展とその系統関係を論じた。これまで共時的に記述してきたデータを、通時的観点から捉え直すのがここでの目的である。

12章では、淡路方言の地域差の成立過程を考察し、8章で行った下位区分を通時的観点から修正し、改新的特徴、すなわち古態の保持ではなく新しく変化した要素の共有に注目することで、淡路方言は北部と中南部にまず大きく2区分される上、中部は系統学でいうところのいわゆる側系統にあたり、洲本・五色・由良を単一の方言区画とするような系統的なまとまりはないことを明らかにした。

13章では、淡路方言と周辺方言との系統関係について論じた。周辺方言との類似はこれまでも指摘されてきたが、改新的特徴に注目したところ、淡路方言は四国方言とアクセント上の例外を共有しており、それが中央式の成立する体系変化前に遡ると考えられることから、系統的には近畿方言よりもむしろ四国方言に近いと考えられることを示した。

最後に、本論文のまとめと今後の展望について述べた。本論文では淡路方言を総合的に記

述するとともに、淡路方言の系統についても考察した。淡路方言のこれまであまり知られていなかった特徴を明らかにするとともに、系統関係についても、これまで近畿方言に分類されてきた通説には修正が必要であることを主張した。